要求発話における“事情表現”の規定因¹

愛知学院大学 岡本真一郎²

Determinants of requesting expressions: Referring to a speaker's state

Shinichiro Okamoto (*Department of Psychology, Faculty of Letters, Aichi Gakuin University, Nisshin-cho, Aichi 470-01*)

The purpose of this study is to examine situational determinants of one type of expressions used in situations of requests: expressions in which a speaker refers to his surroundings or his own condition without using conventional forms of requests (expressions of a speaker's state: ESSs). In four experiments subjects read scenarios in each of which the protagonist needed to make a request, and then the subjects made a note of how they would say in that situation. The findings were as follows: (Experiment 1) Subjects used ESSs more when it was obligatory for the addressee to obey the request than when it was not. (Experiment 2) Intimacy between the protagonist and the addressee did not uniformly influence subjects' use of ESSs. (Experiment 3) When the addressee made a previous statement which indicated his knowledge of the protagonist's goal, ESSs decreased. (Experiment 4) Subjects used indecisive ending expressions (-*kedo*, -*ga*) in ESSs more when the addressee's behavior brought benefits to the protagonist than when it did not.

Key words: requests, verbal expressions, situational determinants, expressions of a speaker's state, obligation, interpersonal relations, benefits.

要求(依頼)の言語的表現には、世界の諸言語でそれぞれ多様なバリエーションが存在することが知られている(Brown & Levinson, 1987; 久野, 1977)。日本語においては、要求する行動を明示する定型的な様式の中にも、窓開けて[よ], 窓開けてくれる[か]?, 窓を開けて下さい, 窓を開けてもらえますか?, 窓を開けて頂けないでしょうか?, 窓を開けてほしいんですけど。というように、狭義の敬語(南, 1977, 以下では単に敬語という)の使用・不使用, 命令文等直接的か疑問文等間接的表現か, 末尾にどのような終助詞が置かれるかなど極めて多様なバリエーションがある。岡本(1986, 1989)は一連の実験で、要求の定型的表現は相手が要求された行動を履行する際のコストに対する、話し手の配慮が大きいほど間接化することを示した。

ところで、要求はこのような定型的な様式で行われるだけではない。含意として表現される場合がある

(Grice, 1975; 橋元, 1989)。頻繁に現れるものとして、要求の前提となる話し手の事情、すなわち話し手周辺の状況や話し手自身の状態・願望等を知らせる形式がある。

窓が開いているんだけど(→閉めて)

資料をもらってません(→渡して下さい)

おなかですいたよ(→ご飯を作って)

山下さんに会いたいんですが(→ここへ呼んで下さい)等で、これらは定型的な要求表現の前後にも現れるが、単独で用いられた場合も()内のような要求を含意する。本稿ではこの、話し手の事情に言及する含意表現(以下本稿では事情表現という)について検討する。

事情表現は文脈によっては様々な意味・意図に解釈されうるが、その状況で相手が話し手に対して特定の行動をとるべきであるという義務・役割関係が明瞭で、表現された話し手の事情が相手のその義務・役割に関連するものであれば、発話が要求であるということ、そして要求の具体的内容が理解されやすい(Brown & Levinson, 1987)。そうした状況では、要求意図を持った話し手は、自分の事情を相手に伝えるだけで相手が行動をしてくれることが期待できる。相手は要求意図を理解しやすいだけでなく、それに応ずるのが相手にとって当然の役割だからである。したがって話し手は事情表現による要求の含意を行いやすいと推測される。

¹ 本研究の一部は、日本グループ・ダイナミックス学会第36回大会(1988)、日本社会心理学会第30回大会(1989)において発表された。

² 本研究については京都大学教授木下富雄先生にご助言を頂きました。また、実験の実施にあたっては愛知学院大学教授酒井亮重先生、同伊藤法瑞先生、同助教教授二宮克美先生、園田学園女子大学講師菅原康二先生のご協力を得ました。厚く感謝の意を表します。

Winterhoff-Spurk, Herrmann, & Weindrich (1986) の, ゲーム場面を利用した要求発話の実験では, 被験者 (ドイツ語話者) は相手にとって義務的な要求を, 事情表現を用いて行った場合が多かった³. Ervin-Tripp (1976) の観察的研究 (アメリカ英語) も, 話し手と相手との職務関係から相手のとるべき行動が義務的に明白な状況で, この種の表現が用いられた事例を列挙している.

これらは上の推測を裏付けているが, 言語的・文化的背景の異なる日本語において同様の結果が得られるかどうかは, 当然確認する必要がある. ここでは日本語話者を被験者にして, 事情表現による要求が, 相手にとって義務的な状況で現れやすいことを種々の場面で実証した後, 相手との関係, 相手の先行発話, 話し手の利益の有無の諸変数が, 事情表現の使用や表現形式の細部に及ぼす影響を検討する.

実験 1

事情表現を用いての要求の含意は, 相手の行動が義務的な状況で現れやすいことを確認する実験を行った. 職業的義務に関わる 4 場面 (コピー A・プリント・実習資料・カメラ A) と, 職業的役割とは無関係に一時的義務が生ずる 2 場面 (掲示板・電話 A) を設定した.

方法

被験者 コピー A・プリント・実習資料・掲示板・電話 A の 5 場面では愛知県内の大学の学生を, カメラ A では京都市内の専門学校の学生を被験者とした. 人数は以下の通り. コピー A: 64 名 (男子 26 名, 女子 38 名), プリント: 80 名 (男子 30 名, 女子 50 名), カメラ A: 男子 82 名, 実習資料: 36 名 (男子 14 名, 女子 22 名), 掲示板: 男子 90 名, 電話 A: 男子 70 名.

手続き 被験者は場面を記したシナリオを読み, その場面で自分が口にすると思う言い方を筆記 (実習資料場面のみの口述) した. その場でどうしても要求ができないときには要求をしなくてもよいこと (要求拒否) が教示された. 実験 2 以下も同様の筆答実験の手続きである.

実験条件 相手が要求に応じる義務の程度の高・低 2 条件を設定した.

場面 コピー A: コピーの色が薄いので, 機械の調子を見せよう. 高条件一文房具店で面識のない同性の店員に要求. 低条件一同性・同学年の親しい人に要求⁴.

プリント: 教師から, 自分だけまだ受け取っていないプリントをもらう. 高条件一教師が渡し忘れている. 低条件一話し手が遅刻して受け取っていない.

カメラ A: カメラを見せるように求める. 高条件一知

人がアルバイトしているカメラ店で, 彼から陳列してあるカメラを見せてもらう. 低条件一知人に私有のカメラを見せてもらう. 両条件とも, 相手は事務的な話をしたことがある程度の同性の知合い.

実験資料: 教師から実習資料の質問紙をもらう. 高条件一前にもらった質問紙が落丁なので, 新しいのを 1 部もらう. 低条件一前にもらった質問紙の内容に興味を持ったので, 新しいのを 1 部もらう.

掲示板: 話し手が掲示板の掲示を写すために, 前に立っている相手によけてもらう. 相手は同性同学年で親しい. 高条件一相手が割り込んで来た. 低条件一話し手があとからやって来た.

電話 A: 電話相手の声が聞こえにくいので大きくしてもらい. 相手は同性同学年で極めて親しい. 高条件一相手の背後が騒がしい. 低条件一話し手の背後が騒がしい.

質問紙評定 コピー A (評定者数 30 名). プリント (30 名)・カメラ A (69 名)・電話 A (58 名)・掲示板 (75 名) は同一学校の別の学生が, 実習資料場面は被験者自身が, 各場面で相手の行動が義務的な程度と相手が要求に応じる可能性を, 7 ポイント・スケールで評定した.

結果

質問紙評定 6 場面とも義務高条件のほうが, 相手の行動は義務的と評定された (コピー A: $t=6.20$, $df=28$, $p<.01$; プリント: $t=2.42$, $df=28$, $p<.05$; カメラ A: $t=6.73$, $df=67$, $p<.01$; 実習資料: $t'=7.63$, $v=24.9$, $p<.01^5$; 掲示板: $t=5.44$, $df=63$, $p<.01$; 電話 A: $t=2.30$, $df=56$, $p<.05$).

要求表現 話し手やその周辺の事情だけに言及し, 典型的な表現等を用いなかった被験者 (例: コピー A: コピーの色が薄くなってきたんですけど; プリント: わたしまだプリントもらっていません; 実習資料: これ 2 枚しかないんですけど; カメラ A: このカメラちょっと見たいんですけど; 掲示板: 掲示が見えないよ; 電話 A: 後ろがうるさいんで聞き取りにくいよ) を事情表現の発話者として, その比率を場面ごとに条件間で比較した (Table 1). (実験 2 以下も同様の分析である.) 各場面とも, 義務高条件のほうが事情表現が多用されていた (コピー A: $\chi^2=21.33$; プリント: $\chi^2=11.17$; カメラ A: $\chi^2=5.80$; 実習資料: $\chi^2=14.21$; 電話 A: $\chi^2=7.92$; 以上 $p<.01$; 掲示板: $\chi^2=4.05$, $p<.05$, いずれも $df=1$)⁶. 両性被験者のいる場面の性差は認められなかった.

⁵ 両群の分散が不等質なため Welch 法で検定した.

⁶ 本実験における 2×2 の χ^2 検定は, 事後的分析を除いて片側検定である. なおセルの期待度数が 5 を下回るときには直接確率計算法も試みたが, 結論に相違は生じなかった.

³ Winterhoff-Spurk らは要求の正当性 (legitimation) という語を用いている.

⁴ この場面は Gibbs (1986) を参考に作成した.

Table 1
事情表現の条件別頻度
(実験 1)

場面	義務	頻度	N ^{a)}
コピー A	高	50.0%	32
	低	0.0	32
プリント	高	50.0	40
	低	20.0	40
実習資料	高	38.9	18
	低	0.0	18
カメラ A	高	21.9	41
	低	2.8	36
掲示板	高	27.3	44
	低	10.0	40
電話 A	高	33.3	36
	低	6.1	33

^{a)} 被験者数(要求拒否者を除く。以下の Table でも同様)。

考 察

結果は予想を支持していた。どの場面でも義務高条件では低条件に比して、事情表現による含意が多く見られた。コピー場面は、話し手と相手との親疎関係にも条件間で相違があるが、他場面では相手との関係は両条件とも同一に設定してある。結果は話し手と相手の対人関係の差異から生じたとは言えない(実験 2 参照)。

また質問紙の、相手が要求に応じる可能性の評定値に関しては、義務高条件のほうが有意に高かったのは 6 場面中 2 場面だけで、2 場面では低条件のほうが数値上は平均値が高かった。この評定値の高低は事情表現の頻度と一義的には関連していないことになる。結果を要求に相手が応じる可能性の差に帰すことはできない⁷。

なお追加実験として学生(話し手)が教師に、調査の質問紙の案を提出して、さらに指示を求める場面を設定した。男女 58 名の被験者中 31.1% が事情表現を用いたが、それらはいずれも話し手が質問紙が出来たことを知らせる内容(例: 質問紙ができたんですが)であった。話し手の事情と相手の義務との関連のしかたによって、多様な表現が事情表現として使用可能と思われる。

ところで、相手が職務として話し手と関わっている場合には、相手に履行義務が生じやすい。したがって事情表現が用いられやすいと言える。ただ、使用はそれに限

定されるわけではない。本実験の掲示板・電話場面の結果からも明らかなように、職務とは関わりのない一時的な義務が生ずる状況でも、事情表現は現れやすくなる。一方、プリント・実習資料場面の結果から明らかなように、相手に職業的役割がある中でも、義務性が低い場合には事情表現は用いられにくくなる。

実 験 2

実験 1 で、相手との親疎関係が同一であっても、相手の行動が義務的である場合のほうが事情表現が用いられやすいことを示したが、このことは、相手との親疎関係が異なっても、義務場面での事情表現の使用に差がないことを必ずしも保証しない。事情表現は相手に行動を要求していることを明示せず、形式上は要求の内容を相手の推測に委ねている。話し手はあらかじめ要求を表現するよりは、相手に対する押し付けの印象が減じられると感じ、この形式を相手を配慮する手段として用いるかもしれない (Brown & Levinson, 1987)。

日本語では相手との親しさが減じていけば、一般に敬語を用いて表現上の配慮が示されるが(南, 1977), 要求は話し手が相手の行動によって利益を得ることを目的とした発話であるため、疎遠な相手に対しては、とくに相手に行動を押しつけない配慮が必要となるだろう。そこで事情表現が、親密な相手に対してよりも多用される可能性がある。実験 2 ではこの点について検討する。

方 法

被験者 愛知県内の大学の男子学生。コピー B: 62 名, 電話 B: 70 名(親条件は実験 1 の電話 A, 義務高条件のデータを使用)。

実験条件 相手の親・疎 2 条件を設定した。

場 面 コピー B: 実験 1・コピー A の義務高条件と同じ。相手は文房具店の同性のアルバイトで、親条件一同学年で極めて親しい。疎条件一同年齢ぐらいで面識なし。

電話 B: 実験 1・電話 A の義務高条件と同じ場面。親条件一同性, 同学年で極めて親しい。疎条件一友人の父親で 1—2 回話したことがある程度の面識。

結 果

Table 2 参照。コピー B では、事情表現使用者は疎条件のほうが有意に多いが ($\chi^2=3.10$, $df=1$, $p<.05$), 電話 B では有意差はなく、数値上は逆に親条件の方が頻度が高くなっている ($\chi^2=.30$, $df=1$, $p>.1$)。

考 察

後述のように相手の親疎によって敬語使用や文末の形式には両場面一致した差が見られるが、事情表現に関しては数値上は両場面の傾向は逆転している。事情表現が疎遠な相手に対する配慮を表す形式であるという予想は一貫した支持を得られなかった。コピー場面でのみ疎条

⁷ 相手が要求に応じる可能性は一般に高く評価されていた(平均値が最低の掲示板・義務条件でも 7 点中 5.4)。これらの場面は総合的考察で論じような、相手の履行に問題がある場面とはいえない。

Table 2
事情表現の条件別頻度
(実験 2)

場面	条件	頻度	N
コピー B	親	31.3%	32
	疎	53.3	30
電話 B	親	33.3	36
	疎	27.3	33

件のほうが事情表現が多かったのは、むしろ次の理由によるのかも知れない。この場面は、相手の職業的役割に関連して、履行義務が生じている。親しい相手に対しては職業的な役割を意識せず、日常の友人関係のまま接するため、要求を相手の義務と考える傾向が弱く、事情表現は比較的現れにくかったのではないか。一方電話場面では、相手に履行義務を生じさせているのは職業的義務ではなく、電話のやりとりの中での相手との一時的な事情である。これは、相手と親しい関係で接していても変化するものではない。そのため親疎間で結果に差が生じなかったのではないか。以上の推測の妥当性は、ここで用いた以外の場面でも確認する必要がある。

一方表現の他の部分には親疎間で違いが現れている。疎遠な相手に対しては、敬語(丁寧語：一です、一ます等)が用いられる度合が極めて高かった(コピー B: 0% 対 83.3%, 電話 B: 0% 対 90.1%) ほか、事情表現の末尾が助詞“けど(けれども)”, “が”となる度合もはるかに高い(コピー B: 10.0% 対 93.8%; 電話 B: 16.7% 対 100%)。末尾が“けど, が”の形式は要求やその他さまざまな場合に用いられ、断定を避ける特徴的な言い回しとされる(金田一, 1975; 森田, 1980; 仲・無藤・藤谷, 1982)。実験 1 でも、親しい相手に対する場面を除くと、末尾が“けど, が”の非断定形で終わる場合はかなり多い。こうした表現が要求場面で用いられやすいとすれば、それは単に相手が疎遠というだけでなく、先述の、要求は話し手自身の利益を意図した発話であるという特性が影響している可能性がある。この点は実験 4 で検討する。

実験 3

話し手は相手の知識の内容を推測して、その場で適切な発話を選ぶ。その手がかりとなるもののひとつに相手の発話がある(Clark, 1979; 仲他, 1982)。要求の場合も、相手が話し手の要求行動を予想して発話を先行させることがある。例えば A が Y に用があって面会しようと、会社の受付を訪れたところ、係員の B が先に“どなたをお呼びしましょうか”と発話したとする。この発話で B がその前提となる“A が誰かに用があり、会いたがっ

Table 3
条件別の表現の頻度
(実験 3)

場面	発話	事情表現	省略	その他	N
面 会	有	11.3%	43.3	45.5	97
	無	18.7	6.6	74.7	91
カメラ B	有	12.1	12.1	75.8	33
	無	32.6	0.0	67.4	43

ている”という知識を有していることが、A に示されることになる。これに対して A が事情表現(例: Y に用事があるんですが; Y に会いたいんだけど)で応ずると、相手の知っていることを、しかも発話の前提に遡って繰り返すことになり、会話の流れとして不自然・冗長である。したがって事情表現は用いられにくくなる可能性がある。この予想について 2 場面で検討する。

方 法

被験者 愛知県内の大学の男子学生。面会: 188 名、カメラ B: 77 名。

実験条件 相手の先行発話有-無 2 条件を設定した。

場 面 面会: 先輩(山下さん)の会社の寮の受付の係員に、山下さんと呼んでもらう。

カメラ B: カメラ A と同じ場面。

先行発話有条件一話し手の発話に先だって、相手から話し手の意向を尋ねる発話(面会: どなたをお呼びしましょうか。カメラ: どれかお見せしましょうか)がある。先行発話無条件一相手の発話はなく、話し手がまず発話。

結 果

両場面とも、先行発話有条件では事情表現が減少している (Table 3)。カメラ B では条件差は有意 ($\chi^2=4.31$, $df=1$, $p<.05$)、面会でも傾向が認められた ($\chi^2=2.00$, $df=1$, $p<.1$)。

考 察

予想は支持される方向であった。事後的ではあるが、事情表現の単独使用のほか、他の表現の前後に付随させた場合も加えて比較すると、発話有条件のほうがかなり頻度が低く(面会: 22.7% 対 41.8%, $\chi^2=6.97$, カメラ: 23.5% 対 60.4%, $\chi^2=9.91$, いずれも $df=1$, $p<.01$)、話し手の状態への言及を避ける傾向がより明瞭である。

また発話有条件では相手の発話の疑問詞に対応する名詞句(代名詞)以外、具体的内容のない表現(省略表現; 例: 山下さんお願いします(面会); これ; それお願いします(カメラ))が発話無条件より多く、とくに面会場面で顕著である (Table 3)。有条件では相手の発話によって相手に知らせるべき情報が絞られ、話し手がそこだけに焦点を当てて発話する傾向が強まったためだろう。

Table 4
文末表現の性・条件別の頻度
(実験 4)

場 面		釣 銭				出 水	
性		男		女		男	
利 益		有	無	有	無	有	無
断定形	37.0% ^{a)}	85.7	3.2	29.6	56.8	96.0	
非断定形	29.6	7.1	83.9	55.6	43.2	2.0	
疑問形	29.6	7.1	12.9	14.8	0.0	0.0	
その他	3.7	0.0	0.0	0.0	0.0	2.0	
事情表現 ^{b)}	27	28	31	27	37	50	
N	29	30	34	28	60	59	

^{a)} 比率はすべて、事情表現発話者数に対するものである。

^{b)} 事情表現発話者数。

実 験 4

実験 4 では相手の行動によって話し手に利益がもたらされる状況——要求を発話する状況——と相手に行動は促すがそれによって話し手に利益がもたらされない状況の、含意表現の末尾の形式を比較する。前者の状況では話し手が相手から利益を得ることへの配慮を表すために(配慮があまり必要でない親しい相手に対する場合を別とすれば)非断定形が多用されるが、話し手に利益をもたらされない後者では、こうした配慮は不要なため、非断定形は前者より少ないと予想される。

方 法

被験者 愛知県内の大学の学生。釣銭：男子 59 名、女子 62 名、出水：男子 121 名。

実験条件 利益有条件と利益無条件を設定した。

場 面 釣銭：受け取った釣銭が間違っているので、女店員に交換するように言う。店員とは面識無し。利益有条件—5000 円のはずが 1000 円札を渡された。利益無条件—1000 円のはずが 5000 円札を渡された。

出水：隣家の庭の水道が出っぱなしになっているので、隣人に止めるよう言う。隣人は年長の男性で、あいさつ程度のつきあい、利益有条件—話し手の家の庭に水が入って、水浸しになりそう。利益無条件—相手の庭の庭に水が入って、水浸しになりそう。

結 果

事情表現の発話の末尾を、断定形(一よ、終止形；例：おつりが多いですよ、おつりが間違ってます)、非断定形(一けど、一けれども、一が)、疑問形(例：おつり 5000 円ではありませんか)、その他(全部で 2 例だけあり、検定の際は除外)に分類した(Table 4)。

釣銭では男女別に分析したが、男女ともに条件差は有意であった(男： $\chi^2=13.95$, $df=2$, $p<.01$ ；女： $\chi^2=8.16$, $df=2$, $p<.05$)。男女とも利益有条件では利益無条件により断定形の頻度が低く、非断定形・疑問形の頻度が高い。対数線形モデルによる分析の結果、男子では断定形($\alpha=3.36$, $p<.01$)、女子では非断定形($\alpha=2.22$, $p<.05$)、断定形($\alpha=2.08$, $p<.05$)の条件差が有意であった。出水でも利益有条件の方が断定形の頻度が低く、非断定形の頻度が高い($\chi^2=22.57$, $df=1$, $p<.01$)⁸。

考 察

予想どおり両場面とも、要求状況である話し手利益条件のほうが末尾は非断定的になった。なお、釣銭の結果を見ると、両条件を通じて女子は男子より非断定形が目立ち、断定形を用いる度合いが少ない。女子のほうが丁寧な表現を用いることの反映と考えられる。

このように釣銭・女子の場合、利益無条件においても末尾を非断定的にする被験者はかなり見られる。ただ、利益有条件に比べれば少ない。同種の行動を相手に促す場合、話し手の利益有無の変数が、末尾表現を大きく左右するといつてよいだろう。

ところで、両実験条件は、利益有条件が相手に履行義務があるのに、利益無条件では義務が明瞭ではない点でも差があるかもしれない。しかし出水場面で事情表現のみを用いた被験者は、むしろ利益無条件のほうが比率が高い($\chi^2=9.17$, $df=1$, $p<.01$ 。釣銭場面は両条件ともほとんど事情表現が使用された)。これは、義務変数から予想されることとは逆である。また、実験 1 のプリント場面では義務低条件でも事情表現を用いた被験者が 6 名いたが、その全員が非断定形を用いている。これらから、実験 4 の条件差は、相手の義務の差によってもたらされたものではないと言える。

総合的考察

以上の実験結果から、次のことが指摘できる。事情表現は、相手が要求に応じることが義務的である状況で用いられやすい(実験 1)。相手の先行する発話によって相手が履行すべき行動を知っていると推測可能なときには、事情表現は使用されにくくなる(実験 3)。そして末尾が“けど、が”となって非断定的なことが多いが、これは要求が話し手に利益をもたらす言語行動であることと関連している(実験 4)。相手の親疎による使い分けは結果が一貫しなかった。職業的役割と結び付いている場

⁸ 各場面・各条件とも敬語が多用されており(74—100%)、敬語使用者だけを見ても条件差は有意であった。したがって条件差は、敬語の使用-不使用によって不随的に生じたものではない。なお敬語の使用率は、釣銭・女子で利益有条件が有意に高い以外は、条件差はなかった。

合のみ疎遠な相手に対して多用された(実験 2)。

ここで、相手に要求に応じる義務がある状況下での、事情表現による含意の増減に影響する諸条件について、他の表現との使い分けも含めて考察する。まず、話し手の事情について相手が何らかの知識や推測を正しく有すると話し手が判断すれば、事情表現は用いられにくくなるだろう。実験 3 では、相手の先行発話によって事情表現が減少し、省略表現が増加する傾向が見られたが、日常の職業的場面でのやりとりでは、相手の先行発話がなくとも省略表現が比較的多く用いられる場合がある(例：タクシーの運転手に“名古屋駅までお願いします”；レジで店員が客に“100 円です”)。岡本(1989)でも、喫茶店でのコーヒーの注文には、20 名中 10 名の被験者が省略形(コーヒー【お願いします】)を用いたし、Winterhoff-Spurk & Frey (1983)の書店における観察調査(ドイツ語話者)でも省略表現が多用された。

これらの場面では、相手の具体的行動(運転手が乗客を目的地 x まで運ぶ；客が店員に代金 x 円を支払う；ウェイトレスが客に飲食物 x を持って来る等)がルーチン化しており、生起する確率が極めて高い。このため話し手は x の内容を除けば自分の事情(相手のそのルーチン化された行動が話し手にとって必要なこと)は相手が正しく推測していると判断可能である。そこで、 x に焦点を絞った省略的表現が用いられやすくなるのだろう⁹。

先行する発話や具体的行動のルーチン化以外でも、その状況に話し手の事情が(部分的に)相手に推測・理解されていると判断できるような手がかりがあれば、事情表現は減少し、相手のわかっていることを省略した表現を使用する可能性は高まるものと思われる。

次に、相手に履行義務があっても、応じるかどうか問題がある状況でも、事情表現による含意が行われにくくなると考えられる(Herrmann, 1983; Winterhoff-Spurk et al., 1986)。第 1 に相手に履行意志がないことがある。Winterhoff-Spurk et al. (1986)の実験では、相手が履行義務を果たす意志がないと話し手に伝えた場合、事情表現は減少した。また筆者は追加実験で、銀行の現金支払機の調整を行員に求める場面を設定した。被験者(男女 34 名)には口頭で最初の要求と、要求をしても相手が応対しない場合の 2 回目の要求を表現させた。2 回目の要求では事情表現は有意に減少した(1 回目 44.1%, 2 回目 8.8%; 直接確率計算法で $p < .001$)。

第 2 に、相手が要求された行動を履行できる条件に何らかの支障があるかもしれない場合(例：教師からプ

リントをもらいたいが、教師はもう残部を持っていないかもしれない)にも事情表現は減少するだろう。この場合には別のタイプの含意表現である。相手の条件を問うたり確認したりする形式(例：プリント残っていますか)の増加が予想される¹⁰。

逆に事情表現の含意の増加が予想される状況もある。Ervin-Tripp (1976, 1087) は、幼児は自分の事情を述べる形の要求を多く用いると指摘し、その理由を話し手が相手に何をしてもらうのかの目標が明確でないまま発話を行うためと推測している。これは成人でも起こりうる。日常場面では本実験のシナリオに示したものは異なり、話し手が何か解決してほしい事態があって相手がその役割にある場合、相手に具体的には何をしてもらうのか見当がつかないことがある。その場合は事情表現は多用されるだろう¹¹。

以上の議論は推測にとどまっている部分も多く、今後の実験的研究によって確証していく必要がある。なお本実験の場合、事情表現による含意は、相手に履行義務がある場面どうしを比べても差があり、定型的な依頼表現がかなり現れやすい場面もあった¹²。上記以外にも、事情表現の頻度に影響する要因が存在する可能性がある。

このほか、次のような課題が残されている。本実験で扱った義務的場面以外に事情表現が用いられる状況として、要求を相手に伝えるににくい場合が考えられる(Ervin-Tripp, 1976)。すなわち相手の感情を損なうおそれのあるとき、話し手の状態を述べるだけで、行動を相手の推測に委ねてしまう可能性がある。その場合、相手は要求されている行動を推測できず、または故意に推測できないことを装って、要求を遂行しない可能性もかなりある。使用状況や相手の反応はどうであろうか。

また本研究では、ほとんどのデータが愛知県内の一大

¹⁰ 相手の条件の問い・確認の形式(例：時刻表を持ってる？(→貸して)；あの本はもう読みましたか(→返して下さい)は、事情表現と並んで頻繁に使用される含意表現である。この形式は要求された行動を履行する条件に疑問がある場合(上の第 1 の例の場合は、時刻表を持っているかどうか不明)には相手の行動が義務的でなくても用いられることが多い(Francick & Clark, 1985; 岡本, 1989, KSP 研究会で口頭発表)。ただ事情表現と同様に、義務的な行動に対してはさらに使用される度合が高くなる可能性がある。

¹¹ 石川・無藤(1990)は、事情表現が専門家-クライアント関係で用いられやすい(例：患者が医師に対して)と論じている。この関係では(相手の行動が義務的であることに加えて)、話し手が相手に具体的に何をしてもらうのかの目標が明確でない場合が多いのではないかとと思われる。

¹² その場合定型的依頼表現の前置きとして話し手の事情に言及がなされることが多かった。

⁹ 客が商品を求める状況では、直接性の高い定型表現(例：(郵便局で)葉書下さい)も用いられやすい(石川・無藤, 1990)。省略表現が多く用いられるかどうかには、要求の種類も関与すると思われる。

学の学生から得られたものである。被験者の年齢・職業・生育地等が異なった場合、どの程度結果に変動が生じるかは検討の必要がある。それに、話し手のパーソナリティや言語能力によっても表現は異なる可能性がある。

最後に、実験3で一部取り上げた相手の先行発話等、要求に先立つ相手の諸行動は、話し手の事情を相手がどのように認識しているかを判断させる手がかりを与え、これが表現に影響を及ぼすものと思われる。さらに話し手が発話を始めてから、相手がいかに対応するかも問題になる。相手がすばやく要求に応じれば発話は途中で中断しうるし、相手の対応が遅い場合や相手が意図しない対応をした場合は、追加の発話が必要になる。言語行動は本来相互作用的に行われている。今後の研究ではこうした相手の行動の影響をはじめとして、相互作用的な観点をより明確にして検討していくことが重要であろう。

付 録

場面のシナリオ例

コピー A 義務高条件：文房具店で学校の授業の資料をコピーしていたところ、機械の調子がおかしくなり、色が薄くなって来ました。あなたは原因がわからないので、店員に見てもらおうと思います。店員の所へ行ってどのように言いますか。（店員はあなたと同性、25歳ぐらいで、あなたと個人的な話をしたことはありません。）[低条件は“店員”を“〇〇さん”と置き換え、〇〇さんの設定を同性・同学年で親しく、メカに強いとした。状況を自然にするためを場所を学校とし、〇〇さんがそばにいたことを付け加えた。]

面会 先行発話有条件：就職している山下さんという先輩に用事があるって、会社の寮へ行きました。玄関の所に受付があって、“面会の方は連絡しますので、お知らせ下さい。”という掲示があります。簡単な用事なので、玄関まで来てもらえば済みます。（山下さんは、あなたが今の時間にやって来ることを承知しており、自分の部屋にいるはずです。玄関わきにかけてある名札も、“在室”になっています。）受付の人（40歳位の男性、もちろん初対面）に話しかけようとする、むこうから“面会ですか。どなたをお呼びしましょうか。”と言って来ました。あなたはどのように言いますか。

[発話無条件は相手の話しかけがない。]

釣 銭 利益有条件：あなたが商店で買物をして、レジで会計をしてもらったところ、おつりが5000円のはずが1000円しかありません。5000円札と1000円札を取り違えたのでしょうか。おつりを返して、正しい金額と交換してもらおうとすれば、レジの店員にどのように言いますか。（おつりをもらってすぐに気付いたものとし、ます。）店員は20代の女性で、面識はありません。

[利益無条件は、1000円と5000円を入れ替え。]

引用文献

- Brown, P., & Levinson, S. C. 1987 *Politeness: some universals in language usage (reissued)*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Clark, H. H. 1979 Responding to indirect speech acts. *Cognitive Psychology*, **11**, 430-477.
- Ervin-Tripp, S. 1976 Is Sibil there? The structure of some American directives. *Language in Society*, **5**, 25-66.
- Ervin-Tripp, S. 1987 Cross-cultural and developmental sources of pragmatic generalizations. In J. Verschueren & M. Bertuccelli-Papi (Eds.), *The pragmatic perspective*. Amsterdam: John Benjamins. Pp. 47-60.
- Francick, E. P., & Clark, H. H. 1985 How to make requests that overcome obstacles to compliance. *Journal of Verbal Learning and Verbal Behavior*, **24**, 560-568.
- Gibbs, R. 1986 What makes some indirect speech acts conventional. *Journal of Memory and Language*, **25**, 181-196.
- Grice, H. P. 1975 Logic and conversation. In P. Cole & J. Morgan (Eds.), *Syntax and semantics*, **3**: *Speech acts*. London: Academic Press. Pp. 41-58.
- 橋本良明 1989 背理のコミュニケーション アイロニー・メタファー・インプリケーション 勁草書房
- Herrmann, T. 1983 *Speech and situation: a psychological conception of situated speaking*. Berlin: Springer.
- 石川有紀子・無藤 隆 1990 要求表現の文脈依存性——その規定因としての役割関係——教育心理学研究, **38**, 9-16.
- 金田一春彦 1975 日本人の言語表現 講談社
- 久野 暲 1977 英国圏における敬語 大野 晋・柴田 武(編) 岩波講座日本語 4 敬語 岩波書店 Pp. 303-331.
- 南 不二男 1977 敬語の機能と敬語行動 大野 晋・柴田 武(編) 岩波講座日本語 4 敬語 岩波書店 Pp. 1-41.
- 森田良行 1980 基礎日本語 2 角川書店
- 仲 真紀子・無藤 隆・藤谷玲子 1982 間接的要求の理解に関わる要因 教育心理学研究, **30**, 175-183.
- 岡本真一郎 1986 依頼の言語的スタイル 実験社会心理学研究, **26**, 47-56.
- 岡本真一郎 1989 要求表現の使い分けの規定因——コストへの配慮と表現——ディスコースプロセス研究, **1**, 73-78.
- Winterhoff-Spurk, P., & Frey, C. 1983 Auffordern am Zeitungskiosk: eine Feldstudie. *Arbeiten der Forschungsgruppe Sprache und Kognition*, **28**. Lehrstuhl für Psychologie III, Universität Mannheim.

- Winterhoff-Spurk, P., Herrmann, T., & Weindrich, D. 5, 13-31.
1986 Requesting rewards: a study of distributive
justice. *Journal of Language and Social Psychology*,

——1990. 2. 1. 受稿, 1991. 1. 19. 受理——